

障害と支援の学びが未来をつくる



植草学園大学 / 植草学園短期大学

特別支援教育研究センター

ニュースレター



vol.3  
2016.9

植草学園大学・植草学園短期大学 特別支援教育研究センター  
〒264-0007 千葉市若葉区小倉町 1639 番 3  
TEL 043-239-9031 (代表) FAX 043-239-9088 (代表)  
TEL 043-239-2624 (センター) FAX 043-239-2700 (センター)



「気になる」子どもとその保護者支援は？



障害のある子どもの就学までの支援は？

新設！科目

## 「早期相談・連携支援」

植草学園短期大学 福祉学科児童障害福祉専攻 教授  
佐藤 慎二



### 時代のニーズを先取りして！

植草学園短期大学では、標題のテーマをダイレクトに追究する科目を新設しました。文部科学省・厚生労働省は、発達障害等の支援を要する子どもの早期の気づきと支援に力を入れています。そして、その保護者をどう支援し、連携していくのかを大切にしています。

本科目は、「気づき」の後に、保育者はどうしたらいいのか—どのような支援・連携機関があるのか、どのように保護者に伝えていくのか、どのように小学校入学を迎えればいいのか—に焦点をあて、大きな三つの柱で構成されています。

### どのような科目なのか？

一つは、学生さんそれぞれの就職希望先の市町村保健センターや乳幼児検診、子育て支援センター、親子教室、言葉の相談室、特別支援学校のコーディネーター、児童発達支援センター等の地元の支援・連携機関を把握し、その役割や具体的な活用方法を学びます。

二つ目は、上記とも関連しますが、教育支援委員会や就学時健診等をはじめとした小学校入学までの具体的な流れとその間の支援、小学校への引き継ぎ等について学びます。

三つ目は、「気になる」子どもの保護者との面談のポイントや進め方、すでに診断のある子どもの保護者との連携の在り方等の具体的な方法を学びます。

支援・連携機関を実際に訪問する等を通して、具体的・实际的に進めていきます。



# 親支援が子どもを育てる

植草学園大学 発達教育学部 准教授

小川 晶



## 1. 親を支援する理由

親を支援する理由にはいろいろありますが、世代間連鎖による子どもへの不利益を予防するのもそのひとつです。世代間連鎖というと貧困や虐待といった顕在している子どもへの不利益を連想させますが、その背景には子どもの生きにくさ、育ちにくさ、そして育てにくさを生じさせている家族の課題が潜在しており、それが連鎖しているケースを多く見受けられます。育児不安、育児ストレスの重篤なケースの多くもこのことが当てはまります。

家族の課題は、家族員である親自身の価値観や養育力に影響を与えてきた原家族の課題でもあるので、親一人の課題ではありません。まして子ども自身の課題では決してありません。それにもかかわらず、生きにくさを抱えて生きていかなければならないのは子どもなのです。

たとえ子ども自身に配慮が必要な個性があったとしても、そこに合理的な配慮をもたらす子どもの最善の利益が実現するか否かは、まずは親の選択によります。子どもは大人がいなければ育たず、最も身近で子どもの育ちに責任を負っている大人は、多くの場合親です。すべての親が子どもの発達過程の規則性や順序性と個体差を理解しているわけではありませんし、後天的な環境による発達の違いを把握できているわけではありません。しかしそれ以上に、その家庭にある価値観や慣習は子育てを難しくさせる要因となりやすく、マルトリートメント（不適切な養育）が日常的に選択されている状況が生じやすいのです。家族の課題によっては、子どもの姿を捉え違い、子ども理解をゆがめ、親のかかわりを不適切にさせる恐

れがあります。たとえば「じっとしていない」という子どもの姿は、専門家によるアセスメントの機会を得ない場合、じっとしている必要性を検討することなしに、元気でよい、パパ（ママ）も小さいときそうだった、じっとできるように練習するなど様々な解釈や方法が選択され、子どもの発達の機会を十分に保障できないことが懸念されても、親の思いや事情を優先させるケースがあります。就学時の選択においては、乳幼児期に実施してきた子どもへの合理的配慮を継続するか否かが葛藤する場合があります。その思いや事情は家族的な課題から生じているので、その課題を改善せずに「子どものために」を掲げて子どもが育つための支援や指導を主張しても、結果的には子どもに不利益が及ぶだけなのです。どんなに優れた支援者がかかわることができたとしても、親子の関係は支援者とのかかわりより日常的であり生涯続くので、子どもの最善の利益を実現するためには子どもを家庭から取り出さずに、親を、家族ごとを、家庭を支援する方が子どもの育ちに効果的です。子どもがその個性を十分に発揮し社会でその子らしく暮らすために、親の子育てを社会でサポートする必要がある、親を支援することは当然のことなのです。

## 2. 親と支援者

親が子どもの個性や合理的な配慮の有効性を理解することは、子育てに懸命であるが故、子どもを愛しているが故、時に難しく、支援者は子どもの最善の利益を追求するが故、それに向かわない親に対してついネガティブな感情を抱きがちで



す。しかし、親の価値観や養育力は世代を超えて連鎖しやすいものであり、家庭は社会との関係でそれらを構築しているのです。たとえば親の「普通」や「気になる」は親個人の価値観から生じているようであって、実は社会を反映したものでもあります。社会に適応して暮らしているからこそ生じる「気になる」や「普通」の指標を考慮せずに親にアプローチすると親とのラポール形成が困難になります。親支援したくても、親に支援を受け取ってもらえなければ、子どもの育ちを保障することができなくなってしまいます。子どもの権利条約や児童福祉法により、子どものケアが保障されることは子どもの権利であり、当然のことです。しかし、親と共感的に連携して子どもを育てていきたいと願い、子どもの育ちを保障するプランニングをしても、それを採用するか否かは子どもの年齢が低いほど、あるいは子どもの個性によってはかなりの部分が親の判断に委ねられているのが実態です。ここが、支援者が親支援に疲弊してしまう点でもあります。

### 3. 支援により親が自ら変容する

支援の有効性の結果は子どもの育ちで確認します。その入り口として、対人援助に共通することですが、親支援もまた支援を評価するのは支援の客体である親です。親が支援者を受け入れ支援を採用しなければ、支援は成立しません。親が支援を受け入れないのだから仕方ないと割り切るのとは簡単ですが、その陰で育ちを保障されずに不利益を被るのは責任のない子どもです。支援を受け入れてもらうために、まず支援に有効なラポール形成が支援者と親との間に必要です。

親との間にラポールを形成し、それを強化しながら支援を有効に展開する方法として、以下の視点と方法が必要であると考えます。

- ①親を捉える時、子どもの親としての一側面だけで捉えずにいくつかの側面で捉える
  - ②チームで多面的にかかわる
  - ③子どもが育つことへの支援と子どもを育てることへの支援を調整する
- 親には子どもの「親としての」役割以外にいく

つかの役割があります。それらの役割は相互に影響しあっているため、「親としての」役割以外の役割における肯定的な経験が、「親としての」側面に良い影響をもたらすこともしばしば生じます。たとえば子どもの育ちに関心が薄いという親のケースの場合、子どもの「親としての」側面の課題として顕在しているわけですが、子どもの「親としての」側面以外での課題が潜在していることがあります。特に子どもを理解することや養育の困難さが重篤なケースは、親の「子としての」(小川 2013)側面での、つまり子ども期の改善していない課題が要因となっていることがあります。「子としての」側面での課題を見極められないまま、子どもの「親としての」役割にアプローチしても、子どもの個性を理解することが容易ではない親は支援者を信頼することはできません。また、子どもの「親としての」側面と、「子としての」側面とに、一支援者がかかわるよりも、別の支援者も重なり合うようにしてかかわる方が、親が居心地よく支援を利用できる場合があります。「親としての」側面での支援者との関係性は社会的な関係であり、そこに「子としての」側面での私的な感情などは表出しにくいものです。

親に寄り添うこと、親を受容すること、それは非常に難しい支援のスキルです。親のどこに、何に、どのようにすることが、「寄り添われている」ことを親が実感するのかを真摯に考えなくてはなりません。支援者の寄り添いを親が実感し続けることが叶ったとき、親は子どもの育ちに必要なものを自ら選択します。子どもの養育方法を指導するよりもスムーズに、親が自ら子どもの最善の利益を実現する方法を選択するのです。

親支援の目的は子どもが育つことです。親を変えることではありません。子どもへのかかわりや子どもが育つ支援と同様、親支援にも専門的なスキルが必要です。子どもが育つ支援には、子どもを育てることへの支援が欠かせないのです。

#### 〈文献〉

小川晶 2013年『保育所における母親への支援—子育て支援のになう視点・方法分析—』学文社



# 特別支援教育を支える学級経営

—通常の学級を中心に—

植草学園短期大学 福祉学科児童障害福祉専攻 教授

漆澤 恭子



特別支援教育が本格実施されてから9年。その「理念」(特別支援教育の推進について一文部科学省)も浸透してきています。「理念」には「特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒への教育にとどまらず、障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となるものであり、我が国の現在及び将来の社会にとって重要な意味を持っている。」と書かれており、私は学校においては次のようにイメージしています。児童・生徒の基本的な活動単位である学級は、どの子にとっても仲間とともに安心して楽しく勉強や活動のできる場所であり、子どもたちが希望を持って自分の未来を描く場所です。その実現に向けた学級経営が特別支援教育の「理念」近づく方法と考えます。そのポイントを挙げていきたいと思います。

## 1 子ども理解

特別な支援を必要とする子どもを理解してはじめてその子のニーズにあった支援ができます。

子ども理解は、その子の日頃の特徴を把握し、どのような課題があるか、その背景は何か、どのような方法で支援すればいいか、今ある力をどのように伸ばしていけばいいか等を考えるために行います。

一口に子ども理解と言いますが、以下の3つ要素が含まれています。

### (1) その子自身の理解

理解の元になるのはその子の様子の把握です。

- ・ 学校生活の様々な場での能力面 (学習、運動、芸術、特技など)、
- ・ 心理面 (発達、認知の特性、性格、情緒の安定、興味など)、
- ・ 成育面 (心身の成育状況・健康など)、

・ 環境面 (家庭の状況や環境、地域の状況や環境など) 等整理し、多面的に行います。

そして、校内委員会を活用し、担任一人だけでなく子どもにかかわる様々な立場からの視点や、標準化された検査などの客観的な視点などにより多角的に行います。

つまずきだけでなく、昨日よりできたこと、得意なことと落とさず把握しておくことで、その子の持っている力を伸ばし自信につなげることができます。そのためには座席表、週案でのメモなど、重荷にならず続けられる記録方法を工夫されることをお勧めします。それらの蓄積によって、学習のどの場面でつまずきやすいか、どのような支援が必要なのか、またその子が自信を持ち活躍できる場はどこかが見通せるようになります。

### (2) 集団の中の個人としての理解

集団における個の理解も、友だちとともに活動できる学級をつくる上で欠かせません。友人関係、授業中の様子など日ごろの観察や、アンケート(Q-Uとして開発されているものもある)によって、学級の中でその子がどのような立場にいるか、どんな思いを持って集団に参加しているかを把握します。

### (3) 集団としての学級についての理解

学級には、そこに所属する子どもたち一人一人が集団となって生まれる固有の雰囲気や力があります。自由な発想や発言が飛び出しやすくなった、どの子もまき込むようなりの良さが生まれ、その雰囲気や力は授業を構成する上で使えます。もし集団が活気に乏しく受け身になってしまうようであれば、個人の良さを使ってプラスの方向に向ける作戦も必要となるでしょう。

学校生活の中では、学級単位での活動が多くな



ります。学習の進捗も、学級集団によって考慮されることが多いことを考えると、「うちのクラスは」という「集団としての特徴」をみとる力と個々の子どもを的確に理解する力を兼ね備えることが担任には求められます。

## 2 学級集団づくり

安心して学習や活動できる学級とは、下図の青枠のような要素を備えています。このような学級をつくるためにまず、違いに気づいたり、多様な価値観を認めたりできるよう、子どもたちへ働きかけます。

### (1) 違いに気づく

4月。新しい友だちとの出会い。自分とは外見や考え方、行動やペースなどが違う子、自分にはできないことができるすごい子がいることに気づいたり、自分が友だちと違うことに気づいたりします。子どもたちが自分から気づいていくことを大切にしたいと思います。そのために友だちどうしが一緒にありのままに行動し、気づける機会を設けます。日常生活または授業のちょっとした場面で、「なるほど！Aさんの考えいいね」「Bさん、それ先生は気づかなかったわ」などと子どもたちに投げかけ、違っていいことと違うのは恥ずかしいことではないことを教えていきます。発達段階やクラスの特性に応じて、それぞれの得意なことが発揮できるゲームや、絵本や物語教材の読み聞かせ、脳の働きの話など方法は様々です。

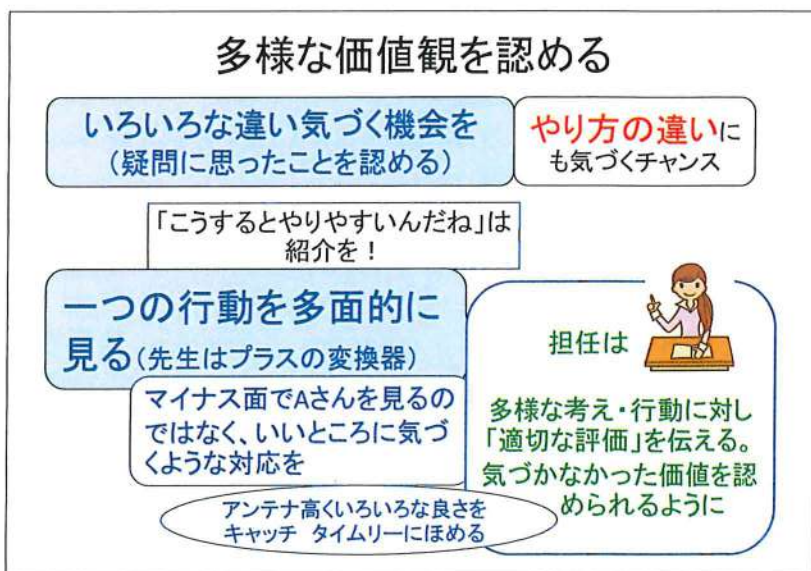
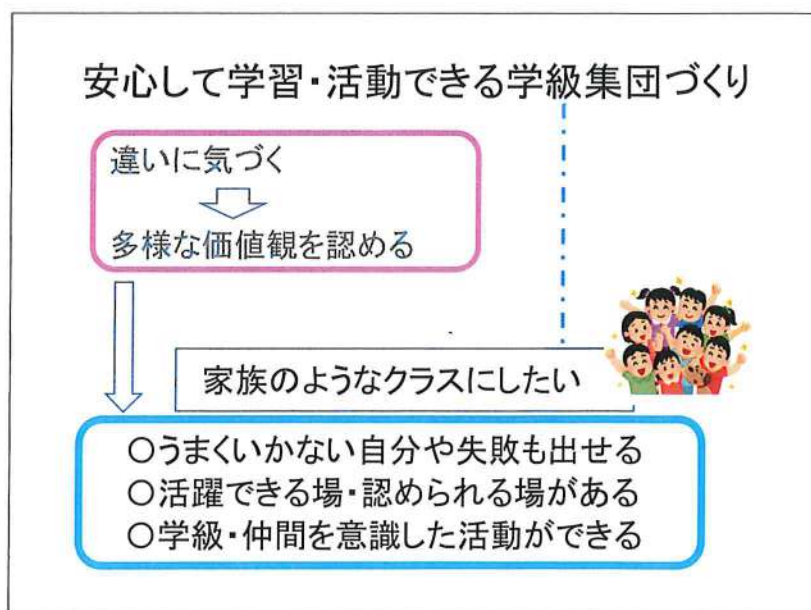
また、「こうするとAさんはやりやすいみたい」と気づく子がいたらそれも紹介していきます。やり方の違いに気づかせるチャンスです。

いろいろな違いを知ることで、すでに子どもたちはいろいろなやり方や考え方があっていいのだと気づいています。

### (2) 多様な価値観を認める

「なぜAさんは～なの？」という質問には、まず疑問に思ったことを

認め、その上で、マイナスに捉えている面だけでAさんを見るのではなくいいところに気がつくような対応をします。ここで先生はぜひ「プラスの変換器」の役目をしていただきたいと思っています。「Aさんは落ち着きがないよね」と言う声が聞かれたら「『すぐやろう』って思っているんだね、行動的だねえ」。また「ハイハイッ！」と手を挙げて友だちにうさぎがられてしまったら、「Bさん、何か思いついたことがあるのね、アイディアマンだね。静かに手を挙げると花丸だね」など、マイナスの行動の部分プラスに読み換えて子どもたちに伝えていきます。子どもたちは先生の反応に敏感です。みんなと違ったことをしたり、先生を困らせたり、作業や活動が遅い子も先生が両手を広げ受け止めてくれるということを知れば、やりにくさのある子どもたちも安心して活動ができます。そして学級





の子どもたちも、みんなと同じ速さで、同じようにできることだけが価値のあることではないのだということに気づき、多様な価値を見つめられる目が育っていきます。

中高学年だったら、障害のある方が書いた本を紹介するのもいいと思います。この場合は、先生が先に読んでおいて子どもたちの感想や疑問を受け止められると子どもたちの理解も広がると思います。本を読んで感想を交換することも多様な価値観を広げていくことにつながります。


### 活躍できる場や認められる場を作る

あてにされてるんだ

もっと頑張りたい

サンキュー！

ここ、お願い！



みんなの役に立った！

あ、それ気が付かなかった！

わ～！すごい！

**自己有用感につなげる**

自分がどう行動したらいいか、どういうやり方が合っているのかを学習し、自己実現を図るためのステップ

発達障害の子のやりにくさの中には、周りからの評価で、目立たなくなったり減ったりすることがある

#### 〈いよいよ学級集団づくりに取り組みます〉

#### (3) うまくいかない自分や失敗も出せる学級に

このような学級を参観したことがあります。担任の先生は、「私の学級、静かじゃなくて……」とおっしゃっていたのですが、子どもたちの声をよく聞くとそれは「おしゃべり」ではありません。「ここどうするんだ？」という子には、「教えてあげようか」。また「う～んわからない！」と呟く子に、「分からないから学校来てんじゃないか」と笑って混ぜ返す子もいます。先生は、子どもたちの日記や自身の失敗談などを話題にし、学級の「それって、あるある！」「ドンマイだよ」「こうしたら？」などの共感や温かいアドバイスの発言を拾っては子どもたちに広げていったそうです。学級の掲示板には「友だちは学校のかぞく」とありました。これは「できなくても、うまくいなくても、失敗しても、そして嬉しいことも、なんでも話せて、バカにされたりせずに温かく受け止めて励ましてもらえる家族のような学級が自慢」という子どもたちのキャッチフレーズだそうです。「私も『かぞく』に励まされています」と先生も子どもたちと笑顔でした。

#### (4) 活躍できる場、認められる場のある学級に

活躍の場や内容は一人ひとりによって違います。しかし、どの子にも、自分の存在を大切にされ認められる場、肯定的な評価を得られる場、成功体験の持てる場があることで、「自分はみんなの役に立っている」「みんなが自分を見守ってくれている」「あてにされている」という自信や自己有用感を持ち、さらには「もっとがんばりたい」「ほかに何が

できるかな」と、考えるでしょう。そのためには、言語環境（後述）にも関係しますが、学級の中に「ありがとう」だけでなく「～してくれてありがとう」「～ってすごい」と具体的に伝え合える習慣があることで、自分がどう行動したらいいか、どういうやり方が合っているのかを知り、社会の一員として成長するためのステップにもなります。

#### (5) 学級・仲間を意識した活動ができる学級に

一緒に生活していく仲間として、助け合える対等の集団に成長する段階です。対等だと思える関係が、真の安心できる学級です。

これまでで自覚してきた自分の力や得意と思うところを、それぞれが学級のために使える機会を用意します。たとえば、林間学校の飯盒炊さんや合唱コンクールなど「自分の力とみんなの力が合わさってやり遂げた」という体験がこれです。私は運動会の組体操を屋上から俯瞰撮したものを見せました。自分が学級の中で役立っている姿、一人でも力を抜いてはできなかった最終ポーズ、持ち場は違っても精一杯の力の結集に、自然に拍手がわきました。

〈持てる力を発揮できるための環境づくりも学級経営では大切です〉

### 3 わかりやすい学習環境づくり・行動しやすい環境づくり

#### (1) 学級に合った学習環境を整える

情報量が多く雑然とした環境では人は疲れストレスが溜まります。黒板に集中できるように、周りには掲示物を貼らないのは、一般的に行われて



いる配慮です。私は教室の環境を整える前提に「学級の子どもたちにはどんな環境が合っているのか」をもう一度振り返ってみることが大切だと考えています。黒板を例にとると、黒板周りは何も貼らないのがいいのか、黒板上段に学習に必要な表を掲示するのがいいのかを考え、一般的な方法をそのまま取り入れるのではなく、「この学級の子どもたちにはこれが合っている」という環境構成をしてほしいと思います。それは子どもたちをよく知る担任にしかできない配慮です。

## (2) 誰でも話せる言語環境を整える

言語環境は子どもたちの豊かな人間関係や温かい集団の形成に深く関係しています。

「ありがとう」「いいね」「一緒にやろう」「ドンマイ」などという、ふわふわことばが満ちている学級をつくりたいものです。

話し手として、相手を尊重したり肯定したりする表現や、相手に伝わりやすい表現方法を考えることも大切です。聴き手として、表現の苦手な友だちが話しやすいようにするにはどうしたらいいか、相手の話したいことや気持ちを理解するにはどうしたらいいかを学級で考えていくことも、対等な関係の中で安心して学習できる人間関係をつくるために大切なことです。上のような掲示もしました。



「こうやって聞いてくれると嬉しいな」

## (3) 行動しやすい環境を整える

特別な支援を必要とする子がいる場合、その子のやりにくさをできるだけ取り除きその子の持っている力を発揮できるように配慮することが義務となりました（合理的配慮）。刺激を和らげるブースの設置や、スロープなどもやりにくさのあ

る子には必要な支援ですし、タブレットの導入もその一つです。それらが十分活用されるためには、前述した、違いや多角的な価値観を認められる学級をつくり、特別視や差別視をしない風土があることが大切です。

目的をもった行動がしやすい環境の一つに、ルールが挙げられます。ルールは集団生活でみんなが気持ちよく過ごすためのものですが、効率よく行動したり、行動を規制したりするだけの単なるきまりではありません。ルールは子どもたちにとって望ましい行動の指標です。それにそって行動することで、成功体験を積んだり、失敗が防げたり、注意されることが減ったり、自信にもつながります。子どもたちの行動しやすさを助けるツールですから、絵や写真を使ったり、やって見せたりなど、子どもたちの特性に合わせた伝え方が必要です。

## 4 教師のリーダーシップ

学級は、成長し合う目的を持った集団です。目的に向かう舵取り役は担任です。舵取り役には、子どもたちが迷った時「この先生が言うのだからそうしよう」と安心してついてくるだけの統率力、先導力、推進力などが求められています。

そのためには子どもと担任の間に強い信頼感がなければなりません。信頼感の構築は一朝一夕にはなりません、子どもを行動の結果だけで判断するのではなく、その気持ちの理解に努め、どうしたらいいかを教え、励ましてくれる、こんな営みをたゆまず続けることででき上がってくるのだと思います。「自分のことをわかってくれる大人」（カリスマティックアダルト）の存在はこれから先も試練に立ったときの行動の指針ともなることでしょう。

私は数年前から隣のシルバー（！）スクールボランティアに入っています。交差点で安全旗を振ったり、教室で先生のお手伝いをしたり、仕事は多岐にわたりますがその中で、子どもたちや、子どもたちを取り巻く環境の大きな変化に驚くことが度々あります。今これがいいと思った方法もどんどん変化するでしょう。しかし、子ども理解に努め、「担任しているこの子どもたちにとってどうだろうか」と振り返り検証する姿勢があれば、いつもベストの学級経営を目指せるのだろうと思っています。



## 学園施設 紹介

### 【図書館】M棟1・2階

1階は、「ラーニングcommons」と称して、情報を知識に、知識を創造に変えていく空間となっています。プレゼンテーションも可能でゼミや授業に活用されています。イスやテーブルも動かせます。飲み物もOK、カフェラウンジ風に語り合いながら学修できます。また、絵本・紙芝居も多数揃えています。

2階は、「静かなスペース」です。専門書や学術雑誌、DVD・楽譜・最新検定教科書なども揃えています。また、グループ学修ができるように、個室のラーニングcommonsが2室あります。パソコンは1階と2階合わせて約100台利用できます。

貸出・文献複写・印刷はもちろん、蔵書検索(OPAC)・文献検索などが可能です。外部への貸出も行っていますので、お気軽に図書館スタッフにご相談ください。

特別支援教育関連の図書は約2,760冊、DVD・ビデオは、142点所蔵しています。

**開館時間** 平日 9:00~21:00  
土曜日 9:00~17:00

春季・夏季・冬季休業期間中は、  
平日のみ 9:00~17:00



新着学術雑誌エリア



ラーニングcommons



蔵書検索(OPAC)は、図書館ホームページからリンクしています。

[http://www.uekusa.ac.jp/school\\_life/library](http://www.uekusa.ac.jp/school_life/library)

## アクセス

本学へお越しの際には駐車場(無料)がご利用いただけます。(但し、駐車場には限りがございます。)

### バスをご利用の方

- ・都賀駅東口ちばシティバス4番乗り場より「植草学園」行きバスで約15分
- ・千葉駅東口ちばシティバス11番乗り場より「植草学園」行きバスで約30分

### モノレールをご利用の方

- ・千城台北駅下車 徒歩約10分

### 所在地

〒264-0007  
千葉県千葉市若葉区小倉町1639番3  
植草学園大学/植草学園短期大学



## 編集後記

子どもの育ちには、障害があるなしにかかわらず、家族、保護者への支援が重要です。本号では、植草学園での取り組みを紹介した上で、親支援の在り方について記事といたしました。論説では、仲間とともに安心して楽しく勉強や活動できる学級経営の在り方について取り上げました。

障害のある子どもたちが生活に困難を感じながらも生きていく姿を目の当たりにして、支援者として何ができるか、どう寄り添うことができるか、特別支援教育研究センターにおいても、教育・保育の現場と連携して、子どもたちの健やかな育ちを保障できる支援者の育成に努めていきたいと思っております。